

## 「世界って広い！」と 教えてくれた YMCAキャンプ

中根 久実

Nakane Kumi

外資系製薬企業勤務

YMCA World Camp 参加者



### ▼YMCAキャンプとの出会い

YMCAに限らず、私が人生初の本格キャンプというものを経験したのは、米国ミネソタ州でのYMCAキャンプ、Camp Menogyn（キャンプメノジン）でした。それまで、YMCAとは予備校でしか接点を持っていなかったのですが、過去に同じプログラムに参加された方のご家族が、私の母にプログラムを紹介したことをきっかけに、母の強い勧めで、私は大阪YMCAが実施していた「アメリカ中西部生活体験ツアー」に参加し、Camp Menogyn と出会うことになりました。このキャンプ場は、アメリカミネソタ州の北端、カナダとの国境あたりにある、Boundary Water Canoe Area という非常に自然豊かな立地の中にキャンプベースを構えています。出発前の説明会の際に、大阪YMCAのスタッフの方が、「このキャンプ場にたどり着くには、途中の駐車場で車を『乗り捨て』、そこからはボートかカヌーに乗り換えて、湖を越えていかないとキャンプベースにたどり着くこともできない場所にある」と話していたのを今も印象的に覚えています。そのため、キャンプベースにはキャビンや食堂施設はあるものの、当時はお風呂もなく、木で作られたサウナがあるだけの非常にワイルドなキャンプ場でした。

このキャンプに参加する人たちは、カヌーにテントや食料を積んで「トレイル」というキャンプを楽しむ目的でここにやってきます。ちなみに冬は湖が凍るので、その上を犬ぞりで駆けるキャンプをするそうです。

人生初キャンプが、海外で、究極にワイルドなキャンプ場だったという衝撃の経験は、この紙面では書ききれないほどあるのですが、

実はこの Camp Menogyn に参加したことが、私の後の人生を大きく変えるきっかけになりました。当時の私は入学した高校の勉強になかなかついていけず、学校生活にも馴染めない、不登校予備軍のような日々を過ごしていました。そんな中、初めての夏休みに参加したのがこの Camp Menogyn でした。その時、私が Camp Menogyn で経験したことは、それまでの15年間の人生では見たことも、経験したこともないことばかりでした。キャンプ場で目にした大自然は、当然それまでの人生では見たこともない絶景でした。湖に沈みゆく夕日を眺めたり、湖の向こうで泳ぐルーン（ミネソタの州鳥）の鳴き声を聞いたりしているうちに、心が洗われていくようでした。

また、同世代の子たちと夕食後にバレーボールをしたり、キャンプファイヤーで歌ったりするうちに、ともかく、楽しいことを楽しいと表現することが許されるような気になり、解放された気持ちになったことを覚えています。自分の生きていた世界がどれだけ狭く小さいか、また世の中には色々な世界があり、自分が思っているよりとっても広いと感じて帰国しました。その後、私は不登校予備軍から1軍に昇格してしまい、日本の高校を退学し、翌年ミネソタ州の高校に進学することになりました。そのくらいのことが起きてしまうくらい、私の人生初Y M C Aキャンプの経験はインパクトのあるものでした。



《World Camp 1994》



《World Camp 1994》



## ▼YMCAでのキャンプ活動

その後、アメリカのYMCAのキャンプには数回参加しており、特に、当時3年に1度開催されていた、YMCA World Campには、メンバーとして1回(1991年)、スタッフとして2回(1994年と1998年)参加させていただきました。このプログラムは、世界各国のYMCAから参加者を募り、ともに生活し、キャンプを営み、プログラムに参加し議論したり、共同で何かを作るといったことを通じ、世界の置かれている状況を肌で感じたり、課題について参加者と考えたりする、壮大なテーマを持つキャンプでした。スタッフとしてプログラムに参加すると、各プログラムの目的などが非常に良く考えられ構成されていて、それがうまく進められるように、裏でスタッフが多大な努力をしていることを感じる事ができました。

どの年のWorld Campも、テーマに沿って興味深いプログラムで構成され、献身的なスタッフのサポートにより運営されていました。例えば、1994年のWorld Campのテーマは、One Earth・One People・Our Responsibilityでした。いろいろな国の人で構成される各グループでキャンプや共同生活をするだけで感じ学び取ることは多いのですが、それだけでなく、仮想の国家を想定したコンフリクトマネジメントのワークショップで、ディスカッションを通して何かを考えさせるというプログラムや、メンバーが協力してキャンプ場にリサイクルポストやピースサイトを建設するなど、目に見えるアウトプットが残るプログラムも加えられており、今見直しても非常に優れたプログラム構成だったと思います。

もちろんその間に、各国の文化を紹介する機会があり、日本からの参加者は浴衣姿で日本食を紹介したりもします。そのほかにも、参加者同士が自由に交流する時間もありますし、毎夜キャンプファイヤーを囲んで歌ったり踊ったりして、共に同じ時間を過ごします。そうして、7日間を過ごした後は、参加者は言語や文化の壁を越え、友達となり、涙ながらに別れを惜しんで母国の帰途につきます。



《World Camp 1998》

このようなプログラムで盛りだくさんのキャンプを運営するには、スタッフの強い熱意が不可欠だったと思います。全員が非常に真摯にプログラムをサポートしていましたし、毎晩スタッフミーティングで熱心に語り合う姿は、今も印象に残っています。各プログラムがスムーズに、大きな問題なく進められたのは、こうしたスタッフの献身的な姿があったからこそだと思いますし、YMCAという共通の理念のもとに集まってきている人たちだからこそできたことではないかと今も思います。

私は、日本人ということもあり、日本からの参加者のサポートが主な役割でした。英語のコミュニケーションレベルの違う参加者に等しくプログラムを経験してもらうことは、一つの大きな課題でもありました。多感な時期に言葉の違うワイルドな環境に置かれることで、体の不調を訴える参加者が出てくることもあり、対応に追われることもありました。そうした課題を解決し、参加者をサポートするためには、ほかのスタッフとの連携が不可欠で、私からの発言を求められることもありました。

キャンプを支えるYMCAのスタッフは、誰しものが互いを尊重しあう姿勢でいてくれたために、意見を発することや、何か要望を提起することはそんなに難しくなかった様に思います。しかしながら、今思うと、20代前半の若かりし頃に、海外で様々な国のYMCAのスタッフと語り合ったり、議論したり、解決策を検討するといった経験を持てたことは、現在の私の性格形成に大きく影響し、その体験が現在の仕事上、海外の人とやり取りをするのにも自信につながっています。また、誰よりもスタッフがプログラムを楽しんでいたのも、良いプログラムを作るうえで大事なことだということも学びました。みんなそれぞれのプログラムを全力で楽しんでいましたし、だからこそ参加者も一緒に楽しむことができたのだと思います。そして、他のスタッフがそうであったのと同様に、私も日本の10代の参加者が、たった7日間の経験にも関わらず、何か大きな気づきを得ている、と感じられることは何より大きな喜びでした。それがプログラムを支える一員として働くことへの大きな原動力にもなっていました。



《World Camp 1998》



## ▼Y M C A キャンプから得た影響とこれからのY M C A キャンプへの期待

私のY M C A キャンプとの出会いは、ほかならぬ、人生をぐるっと変えてしまうようなすごいものでした。そこで体験したものは語りつくせないほどすごい経験であり、お伝えしたように私の性格形成に大きな影響を及ぼしています。また、Y M C A キャンプを通じて得た Global との接点、そこでのコミュニケーションに対する自信が、海外とのビジネスを可能にしてくれたと思っています。そして、アメリカのY M C A のキャンプへの道をつないでくれたのは大阪Y M C A でした。大阪Y M C A がミネアポリスY M C A との連携を生かして、数々のプログラムを展開してくれたおかげで、私は日本からミネソタのY M C A キャンプに参加することができました。

現代は、私が高校生だったころよりも不登校の子どもたちは増えていますし、生きづらさを感じたり、社会の中で窮屈な思いをしたりしている子どもたちが増えているように思います。私がY M C A のキャンプに救われたように、そんな子どもたちに、自分が知っている以上に世界が広がっていて、自分が生きて楽しめることがあるんだ、ということを感じてもらえる機会を、Y M C A のキャンプに提供し続けていって欲しいと切に願っています。

また、World Camp のような機会は、ニュースではない、生の外国を体験するなかなかない素晴らしい機会だと思います。国という単位ではなく、人として接することで分かり合えることや共感できることは本当にたくさんあります。そうした経験を、多感なティーンエイジャーの人たちにぜひ多く持ってほしいと思います。また、その経験や機会が、自然の中に置かれたキャンプ場で持てるからこそ良いのではないかと考えています。

そのほかにも、いわゆるユースと呼ばれる年代の方たちが、キャンプスタッフとして参加することも良い経験になると思います。価値観や利害が違う人たちの中で、リーダーシップをとって何かをやっていくという経験は、社会で何をやるにも、必ず大きな自信につながっていくと思います。突然、会社組織に放り込まれて経験するのではなく、Y M C A キャンプがその練習の良い機会になるのではないかと考えています。

Y M C A は全世界に拠点を持つ組織で、それぞれが独立しているという、まれにみる組織形態の組織だと思っています。また、各国の自然豊かな場所に多数のキャンプ場を持っています。この素晴らしい特性とリソースを生かすことで、World Camp のようなことが可能となるし、それを成功に導くだけの知識とノウハウ、人材を集めることができるのではないかと考えています。ぜひ日本のY M C A も、各国のY M C A と連携しながら、私が経験したような「すごい」キャンプ経験を提供し続け、日本の子どもたちや、若い人たちが、より心を豊かにし、のびのびと世界で活躍できるようにサポートをしていってほしいと願っています。

### Profile

1974 年大阪生まれ。

高校生の頃からY M C A 予備校・英会話学校に通学。高校 1 年の夏に参加した大阪Y M C A の海外プログラムで人生が大転換する。

2005 ~ 2008 年

大阪Y M C A の専門学校に非常勤講師として勤務。

現在は海外経験で培ったコミュニケーションスキルを活かし、外資系製薬会社に勤務しながら、ボランティアとしてY M C A の活動をサポートしている。

